

敗戦の年、昭和二十年に、私は成城高等学校に入学した。

今の成城の町のたまたまいに、どこか惹かれるものがあるとすれば、それは、町がつくられた当時の、骨格のよさだろう。私が成城に通うようになった時、町が出来てから、ほぼ二十年が経っている。

戦争中のことだから、町ぜんたいが、いくらかやつれて見えたが、それでも、出来たての時代を過ぎて、道も、樹も、家々も、しっくりとまとまっていた。

戦後の、苦しい時代だったけれど、気持ちだけは明るかった。

とてつもなく明るかったといってもよさそうである。

戦中から戦後にかけて、成城の町は、いくらかやつれて見えたと言いたけれど、その代わりに、緑の美しさはすばらしかった。

どこの家も、あまり庭木の手入れをする人手がなかったので、

木は伸び放題に伸びて、町中が、

いわば雑木林の中に包まれているように見えた。

綺麗に刈り込まれた生垣の続く街並みもいけれど、その時代の成城の町には、

武蔵野が蘇りつつあるような風情があった。

深くて厚い緑のなかで、町は静かだった。

人影もうすく、まだ、車は走っていないかった。

駅前立って、北へ行く表通りを眺め渡すと、人一人見えなかったこともあった。

今、駅前立っていても、その頃の懐かしい顔は、ひとつも見つけることが出来ない。

成城は歩くのいい町だった。

車や人に気を遣わずに歩ける町だった。

あの町も、あの時が青春の時代だったのだと思う。私と同じに。